

HEARTFUL

笑顔と心をつなぐネットワーク はーとふる

2022年
秋号

■特集

清掃活動 まずは、目の前のゴミを拾ってみませんか——

インタビュー

荒川 祐二 「100万人のゴミ拾い」呼びかけ人代表

|連載|

明るい社会づくり運動と SDGs

われら明社人「加須市明るい社会づくりの会」

ふるさとわが街



「こども食堂」を ご存じですか？

「こども食堂」という言葉は、日本人全体の80%以上が知っているそうです。でも、広く浸透していると思われる「こども食堂」に一度でも行ったことがあるという人は7%しかいません。このような割合の違いは、なぜ起こるのでしょうか？それは「こども食堂」への誤解と偏見があるからです。「子どもではない。困ってもいい。だから行くところではない」と躊躇する人が多いのです。

しかし、実は「こども食堂」は、多世代の地域住民が誰でも行っている、安心・安全な居心地のいい居場所なのです。

行ったことのある7%のうち80%の人が、「もう一度行きたい」と答えてくれていることは、「こども食堂」の重要性と存在意義を物語っています。そして、その「こども食堂」を支えているのが、全国各地にある「こども食堂ネットワーク」であることはあまり知られていません。

ネットワークの拠点は全国に42か所あります。ネットワークのメリットは「物資の調達」「食堂運営者への精神的サポートによる気持ちの継続」「情報の提供」ですが、徳島のように「こども食堂」の数が少ない地域では、直接的な運営支援や対面での話し合いが容易であり、信頼関係の構築を図



佐伯 雅子
徳島こども食堂理事長

りやすいという利点もあります。

半面、理解が深まるにつれ、「こども食堂」運営者がいろいろな問題に悩まされることもわかってきました。それは、「運営費、資金（補助金等）の確保」「ボランティアスタッフの不足」「開催場所探し」「継続性」「行政や地域との関係」などの問題を抱えることが多いということです。特に「継続性の問題」に関しては、行政や地域の理解、そしてスタッフのモチベーションが関係しており、解決には相談を要します。

そうした「こども食堂」に寄り添い、また、「こども食堂」を開設したいという人たちと共に考えていくのがネットワークの使命です。また、先述のように、「こども食堂」が地域住民に開かれた場所であることをアピールしていくのもネットワークの活動です。

食堂運営者やネットワーク運営者は、自分の時間を切り詰めて活動しています。運営サイドが悩み、汗を流しながらも取り組むのは、「こども食堂」に来るいろんな人の笑顔に繋がることがわかっていくからです。

人のために何ができるかを考えていく——それはこれからの自分の未来を幸せにする大切な生き方だと思っています。

耀メッセージ

- 1……**特集** 清掃活動 まず、目の前のゴミを拾ってみませんか——
- 8……「未来へ続く地球社会をめざして——クリーンUP! 2022」実施要項
- 10……明るい社会づくり運動とSDGs
- 13……全国清掃キャンペーン
- 14……われら明社人
- 17……誌上名刺交換
- 18……Palネット
- 20……ふるさとわが街
- 21……掲示板

耀! 連隊 明社レンジャー

Contents

はーとふる2022年 秋号

【目次】

特集

清掃活動

まずは、目の前のゴミを拾ってみませんか——

全国各地でさまざまな清掃活動が行われています。仕事や業務で行ったり、ボランティアとして参加したり。なかには、自分たちの暮らす自治会や地域で清掃を呼びかけられることもあるかもしれません。清掃をとおして清々しさを味わい、達成感や満足感を得ることもあります。

このような清掃活動は、単に生活の場をきれいにするだけでなく、地球環境に目を向けるきっかけにもなっています。

道端に一本のペットボトルが落ちていたら、「まあいいか」と見逃すか、拾ってゴミ箱に捨てるか、あなたならどちらを選びますか。

環境は私たち一人ひとりの手でよりよくしていくことができます。小さな一歩もその積み重ねで大きな力になっていく——それを信じて取り組んでみませんか。

今号では、「100万人のゴミ拾い」の呼びかけ人代表、荒川祐二さんのインタビューと全国各地で清掃活動に取り組まれている方々の声をお届けし、皆さんと一緒にゴミの問題を考えてみたいと思います。



インタビュー

「100万人の「ゴミ拾い」の呼びかけ人代表の荒川祐二さん。これまで日本国内をはじめ、世界26カ国の人たちと「ゴミ拾い」を展開しています。今号では、荒川さんが取り組んできた「ゴミ拾い」についてお聞きしました。

たった一人の行動でも、地域社会を変えていくことができます

荒川祐二さん

「100万人の「ゴミ拾い」呼びかけ人代表



Profile

あらかわ ゆうじ

1986年3月25日生まれ。上智大学経済学部経済学科卒。大学時代に「自分を変えたい!」という思いで、毎朝6時から新宿駅東口の掃除をたった一人で始める。「一緒に掃除してくれる人募集!」と書かれた看板を背負って始まった活動は、全国、世界に広がり、10万人以上の輪となった。以降、その体験を伝える講演会を全国の学校で行うようになり、通算500回を超える。著書に「半ケツとゴミ拾い」(地湧社刊)など多数。

——「ゴミ拾い」を始めたきっかけは

16年前、僕が大学3年生で、就職活動をする時期のことでした。バブルが崩壊し、「どこを目指して、何のために生きていくのか」を、ずっと考えていました。そして、「自分を変えたい、変りたい!」と思っていたのです。そのときに思いついたのが、ゴミ拾いでした。

学生の僕にできることは、目の前のゴミ拾いしかありませんでした。

大学が四ツ谷にあったこともあり、近隣の

新宿にはよく行っていました。

当時、新宿駅東口の広場はめちゃめちゃ汚くて、「なんとかしたい」と思っていました。そこで、ゴミ拾いの場所はここだ! と決めたのです。

早朝6時からスタート。いざゴミ拾いを始めてみると、生肉や血の付いた衣服だとか、カラス・ネズミの死骸、注射針とかいろいろなもの落ちていました。とても拾い切れる量ではなく、初日のゴミの量は、45リットルのゴミ袋20袋にもなりました。

——自分を変えられましたか?

「一緒に掃除をしてくれる人募集!」という看板を段ボールで作り、それを背負って掃除に取り組みましたが、協力者は現れませんでした。それどころか、逆に「怖い人たち」に絡まれたり、殴られたり、蹴られたり……。顔に唾を吐かれ、ジュースをかけられたこともありました。そんな状況でしたが、「1カ月続かなかつたら、お前のことを一生、負け犬」と呼ぶぞ」と、兄から言われていたので、なんとか頑張りたいというのが正直な気持ち

でした。

何より掃除をしたあとにきれいになった広場を見渡す瞬間、何ともいえない嬉しい気持ちがいっぱいあふれてくるのです。「ありがとう」と言葉を掛けてくれる人がいたことも、自分を肯定できる気持ちになりました。

ゴミ拾いを始めて2週間ほどたった時に喧嘩に巻き込まれ、救急車で病院に運ばれてしまいました。「もう

う限界かな」と思いました。しかし、翌日も広場に行って掃除を始めると、一緒にゴミを拾ってくれるホームレスの石浜さんとの出会いがありました。嬉しかったですね。すると、別のホームレスの人が一緒に掃除をしてくれるようになり、仲間が少しずつ増えていきました。

自分が本気で一生懸命にやっていたら、必ず誰かが手を差し伸べてくれる――。石浜さんはそれに気づかせてくれました。おそらくその時が、自分が変わった一歩目だったと思っています。

――ゴミ拾いをして得たことは？

ゴミ拾いを始めて1カ月が過ぎたころ、僕



の取り組みが新聞に掲載されました。さらに半月後には、NHKの特集番組に取り上げられたのです。それをきっかけに「ゴミ拾い」の仲間は増えていき、3カ月で50人までになりました。

半年後の2007年5月3日には語呂合わせで「護美の日」を計画し、「一斉にゴミ拾いしよう!」と実施しました。当日は、27カ所で、

444人の方が参加してくれました。この444人という数が多いのか少ないのか分かりませんが、「俺、こんなことできたんだ」と、生まれて初めて自分を褒めたい気持ちになりました。この「護美の日」の実施は、「次も必ずできるはず」という気持ちにさせてくれました。そして、前に進もうとしている自分を発見できたのです。

将来への道筋も見出せなかった僕が、毎朝5時半に起きて6時からゴミを拾って、それが全国に広がっていきました。いつも逃げればかりだった自分が、444人の人と共に「護美の日」を実施できた経験は、宝です。

僕は、「自分を変えたい」というのが、掃除をするいちばんの動機でした。仲間が増え

るといのは、後付けです。もし、仲間を集めるとか増やすということをモチベーションにすると、思い通りにいかない苛立ちや腹立たしさなど、一喜一憂してしまうのではないのでしょうか。ですから僕は、「自分を変えるため」というモチベーションに軸を置きました。目の前のゴミを拾うことが、自分自身のためにつながっていくことです。まずは自分が取り組む意味や目的を見出すことが、継続していくうえで大事なことでした。

当時の広場には、「ポイ捨て罰金〇万円」と書かれた横断幕が張られていました。それでも、掃除をしているそばからゴミを捨てる人も多かったのです。ところが、しだいに捨てなくなりました。コツコツとゴミを拾う人の姿を見ていた人は、恐らくゴミを捨てなくなると思うのです。

それどころか、いつも嫌がらせをしていた怖いおじさんが、温かい缶コーヒを差し出してくれるようになりました。

そうした経験から、法律や行政が取り締まるといったルールも大切ですが、それ以上に、たった一人の行動でも、それが社会を変えることができるのではないかとすることに気づいたのです。「世の中、世界を変える」というのは、一人ひとりの姿が大事だということを実感しています。

「ノーポイ美化運動」がなくなる日をめざして

——「拾う」ことから「捨てない」「捨てさせない」活動へ

福井・あわら市明るい社会づくり推進協議会



驚くほど多いポイ捨てゴミ

のどかな田園が広がる福井県あわら市は、関西の奥座敷といわれるあわら温泉や奇岩で有名な越前海岸など観光客で賑わう観光拠点の一つです。

そのあわら市の玄関口ともいえる北陸自動車道の金津インターチェンジ周辺には、ゴミのポイ捨てが多く、昭和55年から福井県内の明るい社会づくり運動に携わる有志が「ノーポイ美化運動」を始めました。

その後、旧金津町と^{あわら}芦原町のそれぞれに明るい社会づくり運動の組織が発足し、平成16年に行政の合併であわら市となったことで、現在の「あわら市明るい社会づくり推進協議会」（現会長・牧田孝男さん）として再スタート。「ノーポイ美化運動」は途切れることなく続き、今年で42年になります。

毎年1回、牧田会長はじめ協議会の会員20人ほどが参加します。今年は、9月16日朝7時から2時間、金津インター周辺から国道8号線を3キロ半にわたってゴミを拾いました。ここ数年は、ゴミの量が減ったものの「まだまだ深刻さは





変わりません」というのは事務局長の宮川伊浩さん。当初からと比べると、プラスチックの弁当箱やペットボトル、空き缶などが増え、なかには食べ残しが入ったままの弁当箱や中身の入ったペットボトル、し尿の入った容器もあります。

また、家庭の粗大ゴミも多くみられ、今回は、小型プリンターや車体の一部なども植え込みの中に捨てられていました。それらを一つひとつ拾い集めていくと、わずか10分で各自が手にする40リットルのゴミ袋がいっぱいになりました。

「拾う」と同時に「捨てない」を伝えていく

「毎年、清掃活動をするたびに、ゴミを拾うこと以上に『捨てない』『捨てさせない』活動にしていこうと考えさせられます。それを私たちが発信していくことも大事ではないか」と副会長の達川秀三さんは提言します。

参加者からは、「最近、行政も不当投棄を禁じる看板を立てたり、清掃活動に取り組む団体が他にも出てきたこともあり、以前と比べてゴミの量は幾分か減ったけれども、それでもまだまだペットボトルや空き缶は一向に減らない」との声が聞かれます。

「あわら市明るい社会づくり推進協議会」は今後、清掃活動と同時に、「捨ててはいけない」という意識をもってもらうことを目標にしていく意向です。そのため、「ゴミを資源として再利用する」など、自分たちがゴミのことを学び、多くの人に伝えていくことが大事だと考えています。

活動の様子を
YouTubeで
配信しています。



私と清掃活動

—日ごろ、取り組んでいる活動について
紹介させていただきます。



東京・
江戸川
明るい社会づくりの会
有路 宗弘

「船堀のゴミ拾いでSDGsを地域に広める運動」は、「SDGsを学んで、明るく安心して住める街づくりを目指したい」との思いで発案された活動です。

開始して1年。毎月28日に都営新宿線・船堀駅周辺のゴミ拾いに取り組んでいます。

夏休みは、親子参加もあり、雨の中、傘をさして拾い集めてくれました。たばこの吸い殻やお酒のビン、缶なども多く、マナーの悪さに悲しくなりますが、その反面、「ごころうさま」と声を掛けてくれる人がいると嬉しくなります。

メジャーリーグで活躍中の大谷翔平さんの「ゴミを拾って運を拾う」という言葉がニュースになっていました。私も「ゴミ拾い、街をきれいにかぎりある資源を大切に」を目標に、今後も続けていきます！



新潟・
明るい社会づくり運動
小千谷支部
和田 民仁

6月5日、一日の始まりの朝6時より1時間、毎年恒例の船岡公園西軍墓地の清掃活動を25名で行いました。いくつかの年間活動の中では、地道ではあるが長く続いていて、僕も毎年楽しみに参加しています。

初めに、参加者全員でお墓に向かって黙とうをしてから作業開始。作業が終わり、きれいになった墓地の脇にみんなが集まり、挨拶をして別れますが、なんとも言えないほどみんな笑顔です。今年も元気で清掃活動に参加できたことに感謝します。

この公園は市民の憩いの場でもあり、特に春の桜のお花見は見事！ コロナ禍で遅れていた、地元ロケの映画「峠」も、ようやく上映が始まり、いつも以上に、「兵士への思いと、平和への祈り」を込めたい清掃活動でした。



多摩・
東大和市
明るい社会づくりの会
木下 正己

天候良好、体調良好——。そんな朝を迎えると、トングとゴミ袋をもって早朝散歩に出かける。すれ違う方とあいさつを交わし、朝日を浴びながらの「散歩ゴミ拾い」を楽しむこと約1時間、歩数は約4000歩。おかげさまで健康に日々をおくっている。

集めたゴミからビン・缶・ペットボトルをきれいに洗い、資源に戻してあげる充実感も……。さらには、孫が全員集合したときは、この運動に加わってくれる。通りがかりの方から「えらい！がんばって!!」と声援を受けると、孫たちも「がんばるよ!」と楽しそうに笑顔を見せる。その姿に私も嬉しくなる。



静岡・
明るい社会づくり運動
富士宮地区協議会
村松 廣道

白糸の滝は、2013年に登録された世界文化遺産である富士山の構成資産です。「い

つまでも自然豊かで綺麗な滝にしていきたい」との思いで、今年6月18日に17回目の清掃活動を行いました。

今回は、地元・西富士中学校の生徒や中国人を含む企業など総勢58名で、展望台から滝壺までの階段・歩道の掃き掃除、そして、手すり・案内看板の拭き掃除などをさせていただきました。

行き交う観光客が、「ご苦労さん、綺麗になって気持ちいいよ」と手すりを掃除している生徒に声を掛けてくれて、その生徒たちも「ありがとう」と喜びの笑みを浮かべ、さらに掃除をする手に力が入り、雑巾が苔(こけ)でみえるうちに緑色に染まっていきました。

心も白糸の滝周辺も綺麗になったところで清掃は終了しました。

次回は11月の予定です。

当協議会は昭和47年に活動を始め、「新一年生に黄色い帽子を贈る運動」などを実施してきました。発足50周年の節目を迎え、周年記念事業を富士宮市と共催で行うことになりました。10月16日に行われた記念大会は「環境問題」に特化し、人類学者の山極壽一氏をお招きして「地球環境問題を地域から考えるために―ゴリラからの提言―」と題したご講演をいただきました。

今、世界各地で温暖化が原因とされる災害が起きています。当協議会もCO₂削減の一

助になれば……と、富士山の麓で「ふじさん市民・野鳥の森」づくりの整備を行っています。



大阪・
明るい社会づくり運動
なにわネットワーク
大谷 友昭

日本三大祭のひとつ「大阪天神祭」の『ゴミ分別収集ボランティア』に参加して約25年！

他の参加団体はほとんど大学生で、初めの頃は、若者に負けてなるものと、猛暑の中、死に物狂いで頑張りますが体力の衰えは隠せません。

大阪天満宮を中心に、街中のゴミを拾うのですが、腰は曲がり、足元はふらふら、その危なっかしい様子を見て、飲食でたむろしていた若者が、「こんな年寄りが頑張っているのに申し訳ない！」と、近くのゴミを私たちのゴミ袋に入れに来てくれたのです。

思わぬできごとで、日本の前衛美術家・作家である赤瀬川原平さんの言う「老人力」の気づきでした。私は、普段の生活にも「老人力」を武器にして、威張らず、おごらず、ニコニコ笑って、みなさんと楽しく暮らしています。優秀な野球選手でも、9回裏2アウト満塁

の打席では、監督に「力を抜いて！」と、お尻を叩かれてもよいに力が入って凡退しやすいものです。しかし、もともと年寄りには力がありません。これが「老人力」なのです。これからも無理せず・焦らず・コツコツ仲間と共に、地域の美化活動に頑張ります！



長崎・
大村明社会
安田 佳代子

大村市の森園公園沿岸地先浅場で海岸清掃活動を続けていて、人との繋がりをも感じています。「おつかれさま」や「ありがとう」と声をかけられることも多く、なかには一緒にゴミを拾ってくれる方もいます。

毎月続けていくなかで、2、3名しか参加しないこともありましたが、今では市のボランティアセンターを通じて市民の方や学生が参加してくれています。

清掃を始めたころは、名も無き浅場でしたが、今ではキラキラと輝く、ガラスの砂浜と呼ばれる観光地になっています。これからも美しい浜辺と海の環境保全に取り組んでいきます。

明るい社会づくり運動 SDGs 活動の日

「未来へ続く地球社会をめざして ——クリーン UP! 2022」 実施要項

(主催：特定非営利活動法人明るい社会づくり運動)

1. 実施の目的

「未来へ続く地球社会をめざして——クリーン UP! 2022」は、私たち一人ひとりが自分の住んでいる地域環境への問題意識を高め、SDGs の目標に向けて取り組む日とします。

「明るい社会づくり運動」では、これまで各地の組織・団体が、地域の状況に応じて安心して心豊かに暮らせる街づくりをめざし、清掃奉仕などの環境美化をはじめ、さまざまな活動を展開してきました。なかでも、2010 年からスタートした「明社人みんなでゴミ拾いキャンペーン」では、全国の組織・団体が積極的に清掃活動を行ってきており、本年の春までに参画した団体数は延べ 581 にのぼり、約 5 万 4000 人が参加してきました。

今後はこれまでの活動の輪を広げ、さらに多くの人と連携し、清掃活動や資源回収活動を実施することで、「地球社会」を考えていく機会とし、さらには、地域社会の人たちと世代を超えて、とくに次代を担う青少年に参加を呼びかけ、この経験を将来に生かしてくれることを願っています。

いま、私たちの暮らす地球環境を考えていくうえで、温室効果ガスの排出量の削減ならびに吸収作用の保全及び強化を急ぐ必要があります。ぜひ、みなさんと共に環境美化はもとよりゴミ問題の解消に向かって大きな一歩を踏み出したいと思います。

なお、この活動は、「持続可能な開発目標 (SDGs)」の目標 11.12.13.14.15.17 をめざします。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



2. 実施日 **2022年 11月 23日 水** (勤労感謝の日)

3. 実施内容 清掃活動、資源回収活動

4. 実施場所 全国各地の明るい社会づくり運動の組織・団体が決めた場所
※個人実施の場合も、場所は各自で決めてください

5. 参加のエントリー

明るい社会づくり運動のホームページにある「エントリーフォーム」に必要事項をご記入のうえ、送信ししてください。

<https://forms.gle/GPWEBtvaqqpuLHX68>



※オンラインによるエントリーができない場合は、メール・FAX・郵送によるエントリーもお受けしております。同封の用紙に必要事項をご記入のうえ、事務局までメール、FAX で送信、郵送でお送りください。

●メールアドレス：info@meisha.jp ●FAX：03-5962-3528

●郵送：〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町 2-25-3 普門プラザ日本橋浜町 8 階

「SDGs 活動の日」担当まで

6. 報告書の提出

終了後には、明るい社会づくり運動のホームページ上にある「報告書」、または、同封の「報告書」にご記入のうえ、事務局までお送りください。

〈活動の広報〉当団体の機関誌「HEARTFULL」、ホームページ、フェイスブックに掲載します。※当日までに本活動のInstagramを開設します。

<https://forms.gle/eDb9GpYMQzhXs1L16>



7. ボランティア証明書の発行

当団体の理事長名で「ボランティア証明書」を 1 名につき 1 枚を発行しますので、ご希望の方は所定の用紙にご記入のうえ、事務局までお申し込みください。

8. お問い合わせ先 特定非営利活動法人明るい社会づくり運動事務局

〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町 2-25-3

普門プラザ日本橋浜町 8 階

電話：03-5962-3527 FAX：03-5962-3528

E-mail：info@meisha.jp

【連載】

明るい社会 づくり運動 と SDGs

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT GOALS

SDGsとは「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称です。2015年9月の国連サミットで採択され、国連加盟193か国が2016年から2030年の15年間で達成するために掲げた目標です。このSDGsを達成するためには、将来の世代により良い地球を残そうとする政府、企業、社会、そして市民によるパートナーシップが必要となります。

今号では、SDGsの行動目標を目指すために、「私たちが踏み出すべき第一歩とは何か？」を一般社団法人SDGs市民社会ネットワーク理事・事務局長の新田英理子さんから学びます。



新田 英理子

一般社団法人SDGs市民社会ネットワーク
理事・事務局長

につた えりこ 京都精華大学評議員、科学技術（JST）STI for SDGs審査員、足立区協働・協創パートナー基金審査会審査委員長、法政大学人間環境学部非常勤講師（NPO・ボランティア論）等。
大学卒業後、東京の民間企業の社員教育部門に3年半勤務。退職後、環境NPOなどでの嘱託スタッフやボランティアを経て、98年4月より日本NPOセンターに勤務。14年8月から17年3月まで事務局長。17年4月から19年3月まで、一般社団法人SDGs市民社会ネットワークと日本NPOセンターを兼任。主にNPOに関する相談、研修、全国大会などの企画・運営とNPO法人制度に関するアドボカシー事業を行う。また、行政や企業のNPOとの連携・協働プログラムの相談や企画運営を行う。パートナーシップが最大限発揮されSDGsが達成されることを目指し、活動中。

SDGs達成に向けた活動は、 なぜ、市民活動団体にこそ必要なのか？

グローバル・パートナーシップ

前回、SDGsを理解し、活用し、推進するキーワードとして、「持続不能を理解すること」と「正しく危機感を持つこと」、「課題の背景と歴史を探ること」について、みなさまと情報を共有しました。

今号では、みんなで進めることの重要性と、だからこそ、とりわけ私たち「明るい社会づくり運動」（市民活動団体）が、理解し、活用し、推進する重要性について理解を深めていきたい

と思います。

SDGsを推進する主体について、朝日新聞のSDGs認知度調査によると、SDGsへの取り組みについて、行政の取り組みの次の関心は、企業への取り組みの関心で、市民活動団体（NPO）への取り組み関心は低いのが現状です。

前号でもご紹介した、SDGsの教科書「2030アジェンダ」では、41パラグラフに、「小規模企業から多国籍企業、協同組合、市民社会組織や慈善団体等多岐にわたる民間部門が新アジェンダの実施における役割を有すること

認知する」と記載されています。これが、意味するところは、国連や政府が責任主体として取り組むのはもちろんのこと、民間セクターも主体的に責任感を持って取り組まなければ、私たちの持続可能性も確保できないということです。

日本では、民間セクターというと営利企業のみを指しているような誤解を持っている人もいます。アグループも民間セクターです。

目標17のアイコンには、「パートナーシップを達成しよう」と、目標17を単純化していま

すが、「持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化」するというのが目標17なので、多様な主体、多様な機関、多様な組織、そして多様な人々との連携や協働が強化されることが重要になります。

市民活動団体の強みを活かす

「明るい社会づくり運動」の組織の強みは何でしょうか。活動の強みはなんでしょうか。SDGsの達成を推進するうえで、市民活動団体は、五つの強みを持っていると考えています。一つ目は、包摂性です。SDGsの「誰一人取り残さない」という基本的な理念は、市民活動団体の「困っている人・困ったことを放っておかない」という私たちの基本理念と共通しています。二つ目は、多様性を大事にすること。それぞれの違いを受け入れ、それぞれの尊厳を尊重したうえで、対等に議論し、対話をし、活動を進めていく私たちの活動姿勢と共通しています。三つ目に自発性です。命令され、義務として活動を行っているのではなく、組織のミッションに共感し集まった仲間が活動

を推進しています。四つ目は先駆性です。これは、企業体にもある特徴ですが、市民活動団体は、利益が出るかどうかにとらわれず、公益のために、先駆性を発揮しています。そして、五つ目が、当事者性です。障害者権利条約の基本理念ともなっている「私たちのことを、私たち抜きで決めないで (Nothing About Us Without Us)」という言葉は、最近、若者の活動家の中でも多用されるようになってきました。

みなさまも、自分たちの地域のことは自分たちで決める、というように、当事者意識をもって活動されていると思いますが、SDGs達成においても、「他人事」にせず、「自分事」とすることは重要です。

SDGsにおける当事者とは

SDGsは、2015年9月25日の第70回国連総会において、全加盟国（193か国）が採択しました。国連で採択するときは、日本政府が投票権を行使するので、その時の総理大臣が投票するのですが、アジェンダ2030の一つひとつの文言や目標は、政府や国連機関のみが起案したわけではありません。4年かけて、13回下書きが提案され、様々な当事者間の交渉によって採択されました。その当事者は、図1で示しているように、15のカテゴリーの当事者たちが意見を出すことができる仕組みがあります。

1991年リオサミットを起点としている9つのグループ		
1	Women	女性
2	Children and Youth	子どもと若者
3	Indigenous Peoples	先住民
4	Non-Governmental Organizations	NGO・民間非政府組織
5	Local Authorities	地方自治体
6	Workers and Trade Unions	労働者と労働組合
7	Business and Industry	ビジネスと産業界
8	Scientific and Technological Community	科学者と技術コミュニティ
9	Farmers	農業従事者
その他の当事者		
	Older persons	高齢者
	Persons with disabilities	障がい者
	Local communities	地域（都市部、地方部両方）
	Volunteer groups	ボランティアグループ
	Foundations	財団
	Migrants	移民

図1 アジェンダ2030策定過程及び、現在も見直し等を行うための9つのメジャーグループと、サブグループ (MGoS = Major Groups and other Stakeholders)

SDGs市民社会ネットワークは、NGO(図1の4番目、民間非政府組織)として、意見を出しています。

毎年7月、国連にてSDGsの進捗状況について協議するハイレベル政治フォーラムが開催されます。NGOグループでは、これに向けて意見を出すために、前年の9月には北東アジアで、3月にはアジア地域で議論が行われ、7月に世界中のNGOグループとしての意見をまとめるというプロセスがあります。

それぞれの当事者グループと政府が、縦系横糸となつて、SDGs達成のために意見交換することを目指しています。

SDGs達成のための市民活動団体の意見とは

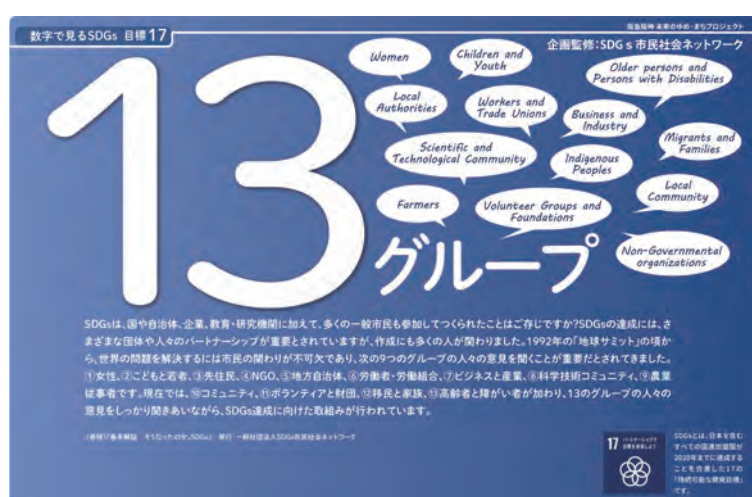
具体的に、SDGs達成のための市民活動団体の意見について、SDGs市民社会ネットワークの提言をもとにいくつか抜粋して紹介します。一つ目の提言は、日本国内でも世界から見ても顕在化しているジェンダー平等に対する政策や具体的な対応の遅れについてです。

たとえば、SDGs目標5-4は、「公共のサービス、インフラ及び社会保障政策の提供、並びに各国の状況に応じた世帯・家族内における責任分担を通じて、無報酬の育児・介護や家事労働を認識・評価する」です。

しかしながら、日本では育児・介護・家事労働は根強く女性のみが実施しています、そのよ

うな現状に対して、SDGs市民社会ネットワークでは、「非正規労働者の70%は女性である。新型コロナウイルス感染症の影響で、特に早期の段階では、雇用契約更新の中断など、雇用に深刻な問題が生じた。シングルマザーの状況は深刻であり、収入減少や無収入に陥った世帯も多く報告されている。ひとり親家庭には、国から特別給付金が支給されることとなったが、就労支援をはじめ、きめ細やかな支援が必要である」と提言しました。

もう一つの提言は、気候変動と防災対策の重



阪急阪神ホールディングス株式会社と連携して、「SDGsトレイン」の中吊りとして、制作したMGoSを説明するポスター

要性に関する提言です。目標13は、気候変動に對し、緊急に具体的な対策を講じることが目標ですが、13・1は、「全ての国々において、気候関連災害や自然災害に対する強靱性(レジリエンス)及び適応の能力を強化する」という目標ですが、その目標に対して、DRR (Disaster Risk Reduction) 災害リスク軽減)と生物多様性保全を両立するため、グリーンインフラなど「生態系を活用した防災・減災(Eco-DRR)」に資する事業をより一層進める必要がある」と提言しました。

以上二つの具体的な内容は、いずれも、2021年7月15日発行、「SDGsスポットライトレポート2021」より抜粋しました。

また、SDGs目標17全体に対する提言としてもいくつか意見を出しており、特に「誰一人取り残さない視点に立った政策づくり」については、何度強調してもしすぎることはないと思います。

このように、SDGsは、経済と社会と環境がいずれも調和され、バランスよく発展していくことが重要なので、市民活動団体から積極的に意見を様々な場面で表明することは、活動することと同じくらい重要なことではないかと考えています。

今回は、実際のみなさまの活動と、SDGs達成のための活動をどのようにとらえ、活用できるのかについて、みなさまと一緒に理解を深めたいと思います。